

対談特集 Vol.3

「言葉の問題」から考える原子力

Topic

通常語と専門用語の違い 日常使う語は情緒的?

「言葉の問題」は原子力をめぐって特に社会とのコミュニケーションに際し非常に重要ですが、現実には多くの誤解や問題を生じています。対談の第三回目は、このテーマをとりあげ、聖徳大学の言語文化研究所長である林史典教授にお話をうかがいました。聞き手は元日経論説委員の鳥井弘之氏です。

鳥井 林先生が言われている通常語と専門用語の違いから、お聞きします。林 通常語には、二つの特徴があると思います。ひとつは、母国語としての特徴です。母国語は、子どものころから親と周りの人たちが使う言葉を理解して、それを記憶したものです。外国語とは習得の仕方がかなり違います。母国語の場合、日常よく使う言葉はあまり辞書を引いて覚えるというのをしない。聞くこと、読むことを通じて自分の中に取り入れ、自然に使えるようになる。ですから、そういう言葉をどのように理解するかによって、日常の言葉というのは個人差が生じやすいのです。そのようにして記憶された言葉を辞書に例えると、脳の中に言葉が豊かで内容の正しい辞書を持っている人と、言葉に乏しく内容の不正確な辞書を持っている人の差が生じることになります。

私たちが普段使っている言葉には意味や用法を勘違いしているものが多いです。例えば「無然(ぶぜん)」として「無然(ぶぜん)」と「無(む)」と「然(ぜん)」とを分けて出ている人が七割くらいいる人が七割くらいいるという文化庁の調査があります。林 確かに「無(む)」と「然(ぜん)」とを分けて出ている人が七割くらいいるという文化庁の調査があります。林 確かに「無(む)」と「然(ぜん)」とを分けて出ている人が七割くらいいるという文化庁の調査があります。



鳥井弘之氏 聞き手 元日経新聞論説委員 元東京工業大学教授

ジャーナリストとしての活動経験を踏まえ、最近も、科学技術分野の深い経験と見識をもとに意見・提言を続ける。主著に「科学技術文明再生論」、「原子力の未来」等。林教授から、昨年、学会の委員会で専門用語の問題に関する見解を聞き、「多くを学んだ」。今回はより広い話題で対談。

このように日常的な語は、自分流に理解し、それを記憶して使っているというところから、非常に個人差が大きい。これが結構多いですね。だから、個人差が出て、全く正対、あるいは正対に近いような意味に解釈されることもあります。このように日常的な語は、自分流に理解し、それを記憶して使っているというところから、非常に個人差が大きい。これが結構多いですね。だから、個人差が出て、全く正対、あるいは正対に近いような意味に解釈されることもあります。

情緒的意味を伴うことが多い。嫌いな人はうっとうしい、嫌だというふうな思いかもしれない。イメージとしては、「夏」と言ったら真っ青な空にざらざら輝いている太陽を思い浮かべる人もいます。最近の流行語である「アベノミクス」は、「レーガノミクス」を模倣した言葉ですが、安部首相の説明が巧みなこともあって、期待感を抱かせる言葉として流通しています。その政策の柱の一つ一つは目新しいくないし、その組み合わせも常識的なものですが、国民には期待、あるいは逆に懸念を感じさせる。これは、中身でなく、感覚や感情、イメージが先行してしまう例です。

Topic

符牒化した専門用語とは 仲間内でしか通用しない言葉

林 通常語に對して、専門用語がある。専門用語が、大別すると二つの種類があります。ひとつは、定義と規定に準じた意味を持つ言葉です。これは、学術用語や法令用語など。これらは情緒的意味を全く伴わないと言って良いと思います。二つめは、俗に言う業界用語、それから学術用語の中にも定義のないものがあって、その分野に属する人々の共通の知識や理解に基づいて流通しています。こういう世界ではかなり、「符牒化」が進んでいて、つまり、この内容はこの言葉で表すのだという、その約束が成り立っていて、言葉の意味と内容が多少ズレていても、ほとんど通用します。専門用語はそういう性格を持っていると思います。符牒化がなせ起るのかについては、言語記号には恣意性(arbitrariness)という性質があります。特長があります。例えば、日本語では水のことを「ミズ」と言いますが、これは単なる約束ごととして決まっているにすぎません。なぜ、こ

Topic

符牒化した専門用語の功罪 社会の誤解招くりリスク

林 最近話題の「再生可能エネルギー」ですが、実際とはかなり違う語ですね。「再生」という言葉で多くの人が思い浮かべるのは、「再生医療」とか「再生紙」とかいう語でしょうね。使わなくなったものを生き返らせるもつ一度使えるようにするというのが「再生紙」の例です。失われたものを元のように戻すことをいうのが「再生医療」です。しかし実際、「再生可能エネルギー」で何を指すかというところ、太陽光とか、水力とか、あるいは地熱、バイオマス、こういうものから得られるエネルギーです。でも、わからないように暗号と使ってしまう、両方の場合があると思います。暗号として使うような場合は、しばしば人を欺いたり、「ごまかしたりすることになるので、結果としてそうなるという場合同様に、戦略的にそういう符牒化というものはあまりやらないほうがいい、わかりやすさという点から見ると良いと思います。



ただ、これは、一面で言うと危険なこと、仮にそれが約束化、習慣化しても、言葉の意味は完全になくなっていくわけではないので、言葉の意味を意識したときに、表味を指すかというところ、太陽光とか、水力とか、あるいは地熱、バイオマス、こういうものから得られるエネルギーです。でも、わからないように暗号と使ってしまう、両方の場合があると思います。暗号として使うような場合は、しばしば人を欺いたり、「ごまかしたりすることになるので、結果としてそうなるという場合同様に、戦略的にそういう符牒化というものはあまりやらないほうがいい、わかりやすさという点から見ると良いと思います。

Topic

新しい言葉と社会 意図的な活用慎重に

林 言葉というのは、広く捉えれば行為のひとつです。仲間内で共通のものを所有するというのが仲間意識を確認する上では大事なことです。言葉にもそういうことは起こります。ファッションやさまざまな同様に、言葉も共有されることによって仲間意識が生まれるし、それをまた良い意味で利用することもできるということはあると思います。若者は新しいものを欲しがると、人のマネをしたがる。同じものを共有したいとか身につけたいから新しい言葉や流行

鳥井 例えば、原子力委員が出してくるような文書を見ますと、そういう言葉が一バラバラのうちに五十個ぐらいい出てきますよ。「産業振興」とかね、全部お題目でしかない文章が飛び交っているわけですね。今言われた観点で見ると、符牒ばかり並んでいるように思います。